

壇上で脚を組んだ女性視察官

—上溝高女のカルチャーシヨック—

川崎高校 白川重敏

はじめに

終戦直後、日本は連合国軍最高司令官総司令部 (General Headquarters of Supreme Commander for the Allied Powers: GHQ/SCAP 以後GHQと略)による間接統治による占領時代を迎え、それまでの日常生活が一変した。GHQの占領政策の基本は徹底した民主化であり、それは「五大改革指令」として展開された。教育行政にも当然民主化の徹底が実施され、連合軍指令通牒として各学校に指令された。一九四七(昭和二二)年、GHQ軍政部は学校民主化の実施状況視察のため、県下中等学校・高等女学校等の視察が行われた。特にマックマナスGHQ軍政部教育課長が就任後、強力に民主化が実施されたため、俗に「マックマナス旋風」と呼ばれている。

本稿は、昨年度まで勤務していた県立上溝高等学校が、終戦当時県立上溝高等女学校として他の旧制中学や高等女学校と同様に、戦後の教育の民主化政策の一環としてGHQの視察を受け、それが当時の上溝高等女学校の生徒にとって初めて外国人との「接触」であり、生まれて初めて体験した外国文化との出会いでもあったこと、ある卒業生の手記を通して紹介するものである。

(注1) 県立上溝高等女学校(現県立上溝高等学校)は相模原市の南西部に位置し、戦後すぐにアメリカ軍を中心とする

進駐軍が相模原市にも来ているので、昭和二二年になって初めて「外国人との接触」があったという訳ではないと思うが、ここで紹介する卒業生にとって、目の当たりに見たのが昭和二二年九月だという。

1 GHQ軍政部の学校視察

(1) 日本側地方教育行政関係者から見た教育官像

学校視察 (School Inspection) は、SCAPINや諸法令に則した教育諸政策の実施状況を検証、確認し、それに応じて日本側に必要な措置をとるための有効な方法として、占領期を通じて重要視された。そして学校視察のねらいは、単なる状況把握に止まらずそれを通じて占領教育管理政策の浸透を図ることであった。そのため軍政部は教育課長に当初R・ペーカー教育官(一九四六年七月〜一月)を就任させた。彼は「勝者としての優越感よりも何よりも教育を愛する、いや子供を愛する教育者であった。教育者としての見識と、そして何よりも人間への愛を深くたたえていた。当時の我々日本人に希望と励みを与えてくれた。(教育課長 鈴木重信)」という評価があるように、伝統や慣行に対し比較的柔軟な対応を示し、日本側関係者との摩擦をさけて斬新的に改革を押し進める方針をとる人物であったが、その後就任したマックマナス大尉(一九四六年一月〜一九四九年一月)は「権力的な肌合いの人物で、指導は峻烈をきわめ、鬼神のような恐るべき存在であった。(教育課長 鈴木重信)」という人物で、教育改革こそ、日本が民主国家、文化国家として再生するための礎であり、幾多の困難があっても、最優先の緊切な政策課題として徹底して取り組むべきであるとの信念を持って教育官であった。^(注2)

(2) 学校視察の基本方針

学校視察 (School Inspection) は、SCAPINや諸法令に則した教育諸政策の実施状況を検証、確認し、それに応じて日本側に必要な措置をとるための有効な方法として、占領期を通じて重要視された。しかし軍政組織の整備や政策課題の優先性による教育管理の性格の変化が当然視察の形態・重点に推移をもたらし、初期における監視、摘発中心の傾向が次第に指導、援助的色彩へと置き換えられていった。

一九四五(昭和二〇)年一〇月、年末にかけて、連合国軍司令部は日本の教育管理に関する基本的指令を発令し、軍国主義・超国家主義教育の禁止方針を日本の行政機関を通じ、日本国民に示達する関係法令を整備した。第八軍司令部は学校視察のための準拠規定の検討に着手し、施行命令「日本の教育施設に対する視察の件」(一九四六年二月一三日)として管下部隊に発令し、一九四六年二月六日、内容が集大成された。

このように学校視察のねらいは、単なる状況把握に止まらず、それを通じて占領教育管理政策の浸透を図ることにあつた。^(注3)

(3) 各学校への通達指令

では実際各学校にはどのような形で、学校視察についてGHQ軍政部の通達が来たのであろうか。県立上溝高等女学校(現上溝高校)には次のような史料が残されている。

(史料1)

昭和二十二年十一月二十七日

教育部長

三市長

地方事務所長 殿

中等学校長

軍政部視察掛官に対する応接について

軍政部掛官の学校視察に際しては、種々細心のご配慮を以て応接のことと思ふが、先般某校巡視の際に掛官を三十分も廊下に待たせ置く等の礼を失する事件などもあり、今後軍政部掛官には誰人たるを問はず礼を缺くことのない様に取り計はれたく、念のため通知する。特に学校長・教頭不在の場合には次席者が責任を以て遺憾措置なきを講ぜられたい。

尚参考のため軍政部民間情報教育課の掛官氏名主要職掌は左記の通りであるから御含み置き願ひたい。

記

マックマナス氏 課長

クルック氏 小学校掛官

シュレーダー女史 高等女学校掛官

田中氏 中等学校掛官

小川女史

新制中学校掛官

備考

軍政部の用務をもって日本人通訳が来校する際も同様に考へられたい。^(注4)

戦後神奈川県は横須賀市を除き、軍政部(のち民事部)の管轄下であり、教育に関してはその教育担当者が責任と権限を持っていた。特に昭和二十二年から二十五年まで就任していたマックマナス大尉は、四大指令その他関係通牒の実施に非常に厳格であつたことは冒頭にも触れたが、違反の疑いある校長を追放したり、教育適格審査が甘いことを叱責したり、随時ジープで学校に乗り付け、厳しい忠告をするなど、いわゆる「マックマナス旋風」と呼ばれ恐れられ、学校

現場ではトラブルをまき散らしていた。この史料は軍政部掛官が来校したときには細心の配慮をもって対応する旨の通達である。このような通達がでるといふことは、占領期初期において係官による横暴な実態も報告されており、学校視察が、かなりトラブルが起きていたことを裏付けるものである。

(注2) 『戦後地方教育制度成立過程の研究』阿部 彰 四九ページ

(注3) 『戦後地方教育制度成立過程の研究』阿部 彰 一〇四ページ

(注4) 『連合軍通牒綴』第二冊 神奈川県立上溝高等学校所蔵文書

2 視察現場から

県立上溝高等学校は、一九一一年(明治四四)年四月に創立した学校で、昨年(二〇〇一年)で創立九〇周年を迎えた学校である。その前身である県立上溝高等女学校は、戦時中は陸軍相模原造兵廠の学校工場にも転用された歴史がある。このことから当然視察の対象になった。

学校視察を受けた上溝高女ではどのような対応をしたのであろうか。『創立九〇周年記念誌』を編集する関係から、当時の職員や卒業生にアンケートを実施し、当時の思い出話などからおおまかな実態を見ることができた。

それによると昭和二二年二学期最初から数度(但し学校には記録なし)、数名(生徒は授業中だったのはつきり覚えていない。当時の職員からは情報なし)の視察官がジープで乗り付けたという。人数はジープに乗れる範囲から四、五名か。内一人は日本人通訳だったという。これに対し学校の対応はどうであったかという、昭和二二年二学期最初に視察があるということは恐らく数日前までに

連絡があったものと思われ、校内における戦争関係書類・図書を大処分したという。それは旧職員からのアンケートにも「本を処分したことがあります」という回答があったことでもわかる。

視察当日は女性係官シュレイダー女史一行が来校し、授業参観・校長室・職員室を視察し、その他の施設については視察する予定が、校長の機転で“歓迎会”をすることによって講堂へ案内し、他の施設への視察を予定変更させたとのこと。英語科の先生も通訳として同行した。シュレイダー女史一行は、講堂で男女同権・選挙・積極的な意思表示・生徒会の設立等を演説し、機嫌良く帰ったという。その時の様子が昭和二二年一〇月発行の学校新聞に掲載されていた。

(史料2)

(前略) …また二二年に軍政部マックマナス教育課長をはじめ教育係官が度々視察に来校して、校内施設や各方面の調査と授業参観をし、講堂で全校生徒に短い講話をした。その時の女学校係官 ミセス・ジュレイダーの言(抜粋)。

「皆さんは皆活発で明朗で理的であり、日本を再建する女性として望ましく、私は皆さんと一緒に生徒自治会で働けるのが嬉しい。しかし一般的に日本ではまだ女子が男子と同等であるという考えが薄いと思う。アメリカの婦人は非常な努力によって選挙権を得たが、日本の婦人は敗戦後軍政部の助けによって容易に得られたので、選挙権を重視していない。これからは選挙に対する心構えをしっかりと持ってほしい。」(『学校ニュース』No.5)；(後略)。(注5)

このほか生徒たちが学校視察に対しどのように反応していたか

を九〇周年記念誌アンケート調査から拾い集めてみると次のようなものがあった。

○GHQの教育担当のマクマナス氏が来て、衛生面を重点的に見ていった。

○英語の時間に五、六人ぐらいの進駐軍が入ってきて授業をただ、じろじろと見て帰った。

○昭和二二年頃、キリスト教の話を入形を使ってバイブル、賛美歌を歌って、教育されたことを覚えていきます。

(注5)『光陰―創立八〇周年記念―』神奈川県立上溝高等学校より

3 視察当日 ―卒業生のカルチャーショック―

ここに紹介する手記は、GHQ軍政部の学校視察に対しての卒業生その時の気持ちである。本の中や、頭の中で描いていたアメリカ人を目の当たりにした時の気持ち、そして文化の違いによるショックが伝わってくる。

(史料3)

手記

昭和二〇年八月一五日、玉音放送と共に長い戦争の時代は終わった。当時上溝高女三年生だった私達は学校工場の作業からは解放されたものの、極度の食糧難と物資不足のため、食糧増産とそのため校地利用を県から指示され、多くの時間が農場作業に当てられ、授業に打ち込めない状態がしばらくの間続いた。

授業が軌道に乗ってきたのは翌二二年の後半からであったと思う。しかし工場として使われた木造校舎の修復はならず、床のない

土間に机を並べ、高い教壇の先生と黒板を見上げての授業であった。冬はコンクリートの土台の通風口と破れた窓ガラスから寒風が吹き込み、オーバー着用で授業を受けた。生徒達の服装は両親の古着で作ったズボン・古毛糸の手編みのセーター・姉達のお古の制服(上衣)、それに大部分の人が足袋と下駄であった。

私達が五年生になった昭和二二年にアメリカの軍政部の指導で生徒自治会が発足し、マクマナス教育課長と係官が県下の各校を視察した。女学校の視察には女性の係官が当たるということで、母校にはミセス・ジュレイダーが来校した。二期の初め頃だったと思うが、先生方も生徒も初めてのアメリカの女性の来校に前日から緊張していた。反面、幾分興味津々の気分であった。荒れた校舎は普段からよく清掃してあったが、更に念入りに磨き、当日を迎えた。

ミセス・ジュレイダーは新美校長の先導で各教室(授業)を見て回り、最後に音楽の得意な下級生のクラスの合唱を聴いた。これは新美校長の機転で、校長自らタクトを振り、女史を大いに喜ばせたそうである。…(中略)…

視察の日程の最後に講堂に全校生徒が参集し、女史の講話を聞くことになっていた。私は床のない講堂の土間に並べられた椅子の最前列に座っていた。ミセス・ジュレイダーが入り口に現れたその時、その美しい容姿に目を見張った。うすいグリーンのスーツ(軍政部女性の制服)にハイヒールの靴、金髪をアップに結い上げた姿は『スタイルブック』(知人の家で見っていた)から抜け出たようであった。

やがて講壇に上がった女史は椅子に腰を下ろし、脚を組んだ。私は眼前数メートルの所に美しい長い脚を見上げて感嘆し、驚いた。

女性が脚を組むとは！しかも壇上で。私達は作法の授業で、和室での正座は両膝を揃える。椅子の場合は脚を揃え、握り拳以上は膝を開けてはならないと教え込まれていた。脚を組んだ大胆な女史の姿勢に驚きながらも、私の眼には美しく映った。やがて女史は立ち上がり、話し始めた。「上溝高女の皆さんは明朝で理知的ですばらしい」と褒め、「皆さんと一緒に生徒自治会で働けるのは嬉しい」「女性が男性と同等であるという自覚をしっかりとほしい」というようなことを通訳を通して語った。誠に男女同権を語るにふさわしい、堂々とした態度であった。が、しかしその時私の心に敗者の悲哀のようなものがよぎった。壇上のミセス・ジュレイダーと土間の私達の距離を思った。あの人達（米国人）と同等の立場で話し合えるまでにはどれほどの道のりが……。終戦まで女性は常に男性の後を少しうつむきながら歩いてきた。これからは胸を張って新しい道を行かねばならない……。とりとめなく考えながら私は妙に興奮していた。

七〇年の人生の中で私は外国の人や自然や文化に接し、何度かカルチャーショックを受けたが、思えば終戦直後のミセス・ジュレイダーの母校訪問が最初の、強烈なカルチャーショックであった。今では外国人より日本の若者達から受けるショックの方が大きい時もあるが……。

（史料2）（史料3）はシュレイダー女史（史料の中ではジュレイダーとなっている）の講演とその時の生徒の反応である。はじめて目の当たりに見るアメリカ人。しかも女性軍人であることへのショック。女性が軍属として扱われることのなかった日本では、女性の軍

人と言うだけで注目されたのである。またスタイルの良さ。そして何よりも人前で脚を組んだことのショック。戦前までの教育・躰を受けていた生徒達は一様に大なり小なりのカルチャーショックを受けたことを手記の中から読み取れる。

〈参考文献〉

- 阿部 彰 『戦後地方教育制度成立過程の研究』 風間書房
 神奈川県立上溝高等学校 『光陰―八〇周年記念誌―』
 神奈川県立上溝高等学校 『上溝―九〇周年記念誌―』
 『国史大事典』 5・8 吉川弘文館
 『相模原市史』 第4巻 一九七一年
 『朝日新聞』 縮刷版（一九四六年・一九四七年）
 『神奈川県史』 資料編12 近代・現代(2) 政治・行政2
 『城山町史』 3 資料編 近現代
 『城山町史』 6 通史編 近現代
 『決定版 昭和史』 9・10・11 毎日新聞社 昭和五八年
 『立野 神奈川県立横浜立野高等学校60周年記念誌』 平成八年
 二見修次 「神奈川県における戦後教育改革に関する研究（Ⅱ）
 ―教職追放と教職員適格審査の状況について―」 『神奈川県戦後教育史研究』 第二号 神奈川県戦後教育史研究会
 一九九八・五
 外務省編 『日本占領及び管理重要文書集 1―6巻』
 一九八九 日本図書センター
 『GHQへの日本政府対応文書集成』
 昭和二〇年九月―二七年四月』 一九九四

文部省『終戦教育事務処理提要』第四集

戦後教育資料収集委員会編『戦後教育資料総合目録』 一九六五

『GHQ指令総集成』 東京エムティイ出版 一九九四

県立教育センター『神奈川県教育史 通史編下巻』昭和五十四年

神奈川県教育委員会『神奈川の教育』戦後三十年のあゆみ

昭和五十四年